

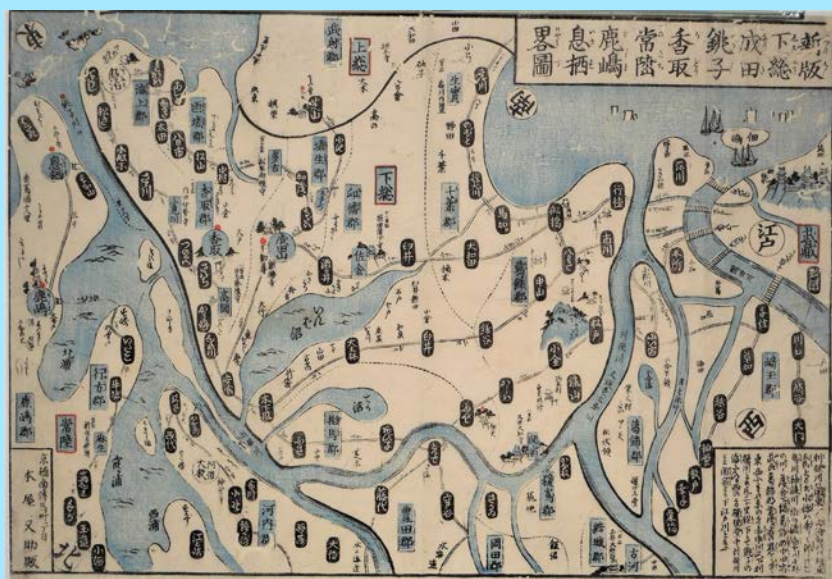
# パネル展「船の旅」

このたび、パネル展「船の旅」を開催し、江戸時代に庶民の間で人気を博した、船による遊覧の旅の行程をご紹介いたします。

江戸時代以前に船が主要な交通手段であったこと、そして当時の人々がそれを利用して利根川流域の寺社参詣の旅を楽しみ、その周辺が「観光地」として栄えるようになったことなどをお伝えできればと思います。新型コロナウイルスの流行により自由な旅もできない現在、この展示を通し、少しでも昔の船旅気分を味わっていただけましたなら、幸いです。

## 1 利根川の船旅

江戸時代には、人々の移動自体が原則として規制されていました。とはいえ、実際には社寺への参拝は特例とされていたため、江戸時代中期以降は、社寺参詣の旅が一種のブームのようになっていました。そんな中、利根川を船で下りながら鹿島神宮、香取神宮、息栖神社の「三社詣（もうで）」をする、一種のクルーズツアーがありました。世にいう「木下茶船」です。随分な人気だったらしく、多くの書物にも取り上げられています。



新版  
下総成田銚子香取常陸鹿嶋息栖略図

江戸時代後期

当館蔵

## 2 出発～まずは江戸から木下へ



木曾路名所図絵 行徳河岸

文化2年(1805)

秋里籬島 著、西村中和 画

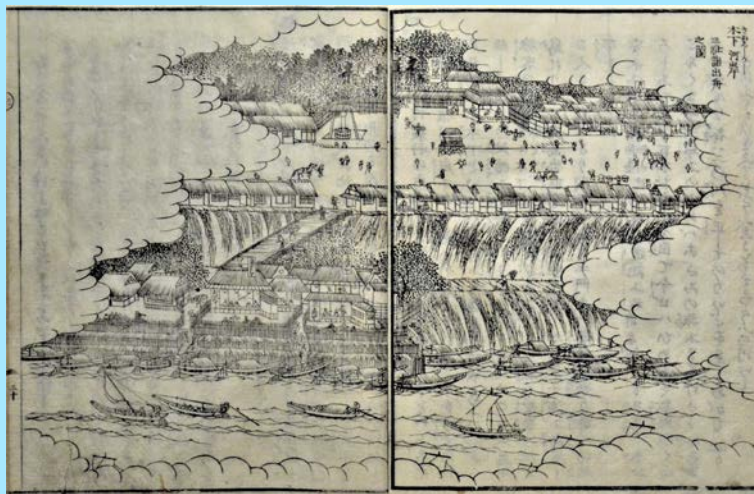
埼玉県立熊谷図書館蔵

文化2年(1805)刊行の『木曾路名所図会』は、「名所図会」シリーズの名執筆家である秋里籬島(あきさとりとう)が絵師の西村中和(にしむらちゅうわ)を伴い、木曾路や東国三社、日光などを回る旅程を書いたもので、その第5巻には三社詣の船旅の様子が挿絵を交えていきいきと描かれています。その概略を見てみましょう。

三社を詣でようと朝方、日本橋の宿を立った籬島と中和。二人は小網町三丁目の行徳河岸から船を手配して乗りこみます。

## 3、木下河岸で茶船の手配

行徳から陸路を歩き、にぎやかな木下河岸に着いた籬島と中和。船宿に落ち着き、行き先を伝えると船を手配してもらえました。ここで昼食をとったら橋の脇から船に乗り込みます(これぞ木下茶船です)。漕ぎ出せば、船足は軽く、葦や真菰(まこも)を揺らす川風が夏の暑さを忘れさせてくれます。兩岸ははるかに遠く、夕日は西に傾いていきます。船は神崎に着き、今夜はここに泊まりました。



利根川図志 木下河岸三社詣出舟之図

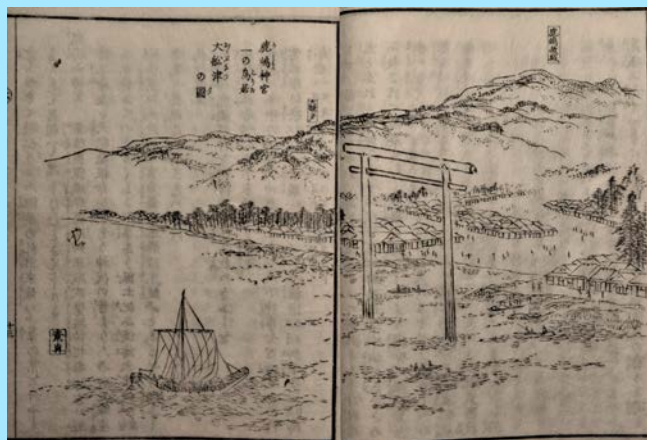
安政2年(1855)

赤松宗旦 著、葛飾北斎(2代目カ) 画

当館蔵

## 4、木下茶船で三社詣

神崎明神に詣でた後、再び船に乗ります。さらに東へ進み、津の宮河岸から上陸して香取神宮へ。参詣を済ませたら、また津の宮から船に乗り、次は息栖神社にお参りします。その後また船に乗ると、川の幅はさらに広くなり霞ヶ浦の北浦に入り、鹿島の一の鳥居に到着です。鹿島の社まで緩い坂道を上り、鹿島神宮に入りました。



利根川図志 鹿島神宮 一の鳥居 大船津の図  
安政2年(1855)  
赤松宗旦 著、山形素真 画 当館蔵



現在の津宮

## 5 ちよいと足を延ばしましょう ～利根川の寄り道名所～

三社詣をした人々は、大抵、繁華街のある潮来で「精進落とし」として宿泊します。そこからは、オプションツアーとして、阿波大杉神社や、銚子の磯巡りなども楽しめました。また、利根川を戻り、安食河岸から少し歩けば成田山新勝寺にも参拝出来ます。

町の喧騒を少し離れ、信仰あり、明媚な景色あり、と気楽に行って帰れる利根川の船の旅、さて、いかがでしたでしょうか。



成田山真図  
歌川豊国(三代) 当館蔵